歴史を歩く ⑥

町文化財紹介コーナー

「六　地　蔵」

六地蔵

小学校一年生の頃、教室の片隅に本棚があって、その中の一冊に地獄絵が載っている本があった。なぜ、一年生の教室にそのような本があったのかは分からないが、その本を見て、初めて「地獄」というものがあることを知った。

大抵の人が知っているとおり、地獄ではうそつきは舌を抜かれ、また、生前の悪行によって、焼かれたり、針の山を歩かされたりなどなど、悲惨な罰が待ち受けているのだ。

死後、三途の川を渡れば、そこに閻魔大王がいて、その人の生前の行いから、地獄行きかどうかが決まる。したがって、地獄行きの判決を下す閻魔大王は恐ろしいイメージが強い。

ところが、日本では浄土信仰が貴族の間で普及した平安時代以降、閻魔大王は本来「地蔵菩薩」であるという信仰が広まった。極楽浄土に行けない者は、必ず地獄に堕ちるという信仰が広がるとともに、地蔵に、地獄の責め苦から救済してほしいと願ったからだ。

地蔵菩薩は、釈迦が入滅してから、56億7千万年後に弥勒菩薩が出現するまでの間、現世に仏が不在になってしまうため、輪廻転生（死んだ魂が生まれ変わること）の苦悩から衆生（生きとし生けるもの）を救うため現れたと言われている。

ところで、輪廻転生の苦悩とは何か？

前世での行いによって、6種類の世界に生まれ変わるとされ、これを「六道輪廻」と言う。

・「地獄道」…前世で最も罪の重かった者が転生する世界。

・「餓鬼道」…前世で物欲・食欲が強いゆえ、満たされないと人を恨んだり、妬んだりしたものが行く世界。満たされず飢えに苦しむ世界。

・「畜生道」…人間以外の動物に転生する世界。弱肉強食の厳しい世界に身を置き、あるいは人間に使役されることになる。

・「修羅道」…生前、争いを好み、人を陥れ、慈悲の心を失った者が転生する世界。永遠に阿修羅の下で戦い続けることになる。

・「人道」…いわゆる私たちの世界。苦悩もあるが、喜びも得られるうえ、仏の教えを聞くこともできる。つまり、六道輪廻の世界から脱却できる可能性もある。

・「天道」…前世で善行を積んだ者が住む世界。人間よりも寿命が長く、苦しみも少ない。

以上が、輪廻転生した時の6つの世界、「六道」である。

地蔵菩薩はこの6つの世界に生きる衆生を救うため、6体に分身し、「六地蔵」が現れたのである。

町内では、馬場集落内の墓地にある「山下家の六地蔵」と、中央公民館裏山の墓地にある「多聞院跡の六面地蔵」が、現在、町指定を受けている。

「山下家の六地蔵」は江戸時代中頃の宝暦6年（1756年）のもので、産後の肥立ちが悪く、22歳で他界した山下家の息女のために建てられたものである。

このように、墓地や寺の境内に死者の追善供養のために地蔵菩薩は建てられ、やがて疫病・災害の防止を願って、村の入り口の道路脇に建てられるようになった。現代になって、事故の起きた場所の死者の供養や、交通安全を願って建てられた地蔵菩薩が多く見られるようになった。

我々にとって、慈悲深く、最も身近にあって、親しみのある「地蔵菩薩」であるが、あの「閻魔大王」と同じとは、やはりイメージし難い。

しかし、地蔵菩薩であれ、閻魔大王であれ、我々の善行も悪行も、すべて見抜いていることには間違いないのだ。

【大崎町埋蔵文化財専門員　内村憲和】